

「もしもしかめよ」考

山 川 偉 也

はじめに

本論考『「もしもしかめよ」考』は、私による一連のゼノン研究の副産物である。エレアのゼノンの有名な四つの運動逆理のうち第二は、アリストテレス『自然学』Ⅱ巻9章における報告にあっては、たんに「アキレウス」とだけ呼ばれている。しかし、シムプリキオスの『自然学』注釈にあっては、アキレウスが追走する相手方は「亀」となっている。つまり、第二逆理は「アキレウスと亀」と呼ばれてしかるべきものであったのだ。では、何故 $\dot{\text{Α}}\dot{\text{Κ}}\dot{\text{Ι}}\dot{\text{Λ}}\dot{\text{Ε}}\dot{\text{Υ}}\dot{\text{Σ}}$ と $\dot{\text{Κ}}\dot{\text{Υ}}\dot{\text{Λ}}\dot{\text{Ε}}$ なのか。1993年から4年にかけて、私はアテネ大学においてゼノン研究に打ち込んだが、そのとき私はこの問題に対する一応の決着をつけた。すなわち $\dot{\text{Α}}\dot{\text{Κ}}\dot{\text{Ι}}\dot{\text{Λ}}\dot{\text{Ε}}\dot{\text{Υ}}\dot{\text{Σ}}$ と $\dot{\text{Κ}}\dot{\text{Υ}}\dot{\text{Λ}}\dot{\text{Ε}}$ という組み合わせは、一方ではホメロス『イーリアス』第22書にみられる $\dot{\text{Α}}\dot{\text{Κ}}\dot{\text{Ι}}\dot{\text{Λ}}\dot{\text{Ε}}\dot{\text{Υ}}\dot{\text{Σ}}$ と $\dot{\text{Η}}\dot{\text{Κ}}\dot{\text{Υ}}\dot{\text{Λ}}\dot{\text{Ε}}$ の競争譚と、他方では現存イソップ寓話集の中核をなし、ファレロンのデメトリオス（BC350–280年頃）の編纂した *Aesopia*（『イソップ集成』）に直接につながると想定される *Augustana*, I (Codex Monacensis 564, これの祖本はAD 1ないし2世紀に遡ると考えられている）所収231話のうちの「かめとうさぎ」（ Χελώνη καὶ λαγῶς ）の競争譚が交叉した次元において成立したものである、と。その結論に達するまでに数々のイソップ文献が博搜されたが、その過程におい

て、私は、わが国におけるイソップ寓話受容の歴史の一端にも触れることとなった。唱歌「うさぎとかめ」に登場する「亀」のルーツを探る本論考は、その副産物として成ったものであるが、世に問うた拙著『ゼノン、4つの逆理』（講談社、1996年）は別として、日本におけるイソップ寓話受容史に関わる拙稿は、長く筐底に秘されたままとなった。本論考はそうしたものの一篇であって、一部の人々にしか示したことのなかったものである。その旧稿に若干の手を加え、いま改めてこれを公開するが、その成立の事情からして、これは、私の第二逆理研究（‘Zeno’s Second Paradox against Motion, The Achilles’）と併せ読まれることが望ましいものである。

I 幼年唱歌「うさぎとかめ」と「我輩は猫である」

うさぎとかめ¹⁾

石原和三郎作詞・納所弁次郎作曲

- 一 「もしもし、かめよ、かめさんよ、
世界のうちに、おまえほど、
歩みの、のろい、ものはない、
どうして、そんなに、のろいのか」
- 二 「なんと、おっしゃる、うさぎさん、
そんなら、お前と、かけくらべ、
むこうの小山の、麓まで、
どちらが、先に、かけつくか」
- 三 「どんなに、かめが、いそいでも、
どうせ、晩まで、かかるだろ、
こころで、ちょっと一ねむり」

「もしもしかめよ」考

ゲーゲーゲー、ゲーゲーゲー。

四 「これは寝すぎた、しくじった」

ピョンピョンピョンピョン、ピョンピョンピョン

「あんまり遅い、うさぎさん、

さっきの自慢はどうしたの」

石原和三郎²⁾作詞・納所弁次郎作曲のこの唱歌ほど、かつて、こどもたちに愛され歌われたものも少ないのではないか。読者のなかには、「もしもしかめよ、かめさんよ」の「かめさん」のかわりに、「○○さん」を置き換えたり、「シモシモメカヨ、メカサンヨ」のような逆さことばで歌ったりしたひともあるはずだ。

明治の末頃には、この唱歌はすでによく知られていた。夏目漱石の『吾輩は猫である』が高浜虚子の主催する雑誌『ホトトギス』に連載されはじめたのは明治38年（1905年）1月のことだが、その第2回目に石原和三郎作詞の「うさぎとかめ」がでてくる。

舞台は正月を迎えた苦沙弥宅。先生が食べ残した雑煮の餅が、台所に置き去りにされたお碗の底にこびりついている。「吾輩」はそれをつくづく眺める。なにかぬるっとして、不気味だ。が、食べてみたい。「食おうかな、やめようかな」と、しばし逡巡、あたりをうかがう。

「幸か不幸か誰も居ない。御三³⁾は暮も春も同じような顔をして羽根をつけて居る。小供は奥座敷で『何と仰しゃる兎さん』を歌って居る。食うとすれば今だ。もしこの機をはずすと来年迄は餅というものの味を知らずに暮らして仕舞わねばならぬ」。

意を決した「吾輩」は、「あぐりと餅の角を一寸ばかり食い込んだ」。その結果は、餅が歯にくいこんで、「噛んでも噛んでも、三で十を割る如く尽未来

際（じんみらいざい）方（かた）のつく期（ご）はあるまいと思われる」具合となった。さあ、たいへんだ。

「菌が餅の肉に吸収されて、抜けるように痛い。早く食い切って逃げないと御三が来る。小供の唱歌もやんだようだ」。

『幼年唱歌（二の上）』出版後4年にして、「もしもし、かめよ」は、すでにすっかり子供の世界にとけこんでいたのである。

Ⅱ かめさんのルーツはどこか

ところで、問題のこのかめさん、いったいどこからきた亀なのだろうか。こう尋ねてみたい気持ちになるというのも、このかめさん、なかなか端倪すべからざる図太い神経の持ち主のようで、どうやら日本産の亀のように思われるからである。というのも、このかめさん、つねづね自分のアンヨに關してだけは、どうのこうのと金輪際こんりんざい言ってほしくないと思っていた節があるのだが、それを、言うにもこと欠いて傲慢不遜で失礼な兎が、なんと、「せかいのうちに、おまえほど、あゆみの、のろい、ものはない」と嘲笑し、見下したのだ。それに対し、俄然、憤然、「なんと、おっしゃる、うさぎさん!」、と負けて当然の競走をみずから買って出たのだ。その心意気やよし。しかし、その態度からして、このかめさん、浦島太郎が助けてやった、あの龍宮城のかめさんとは一味違うパーソナリティーの持主のように思われるのだ。では、この気概に富んだ「かめさん」、どこのかめさんなのだろうか。そのルーツはどこにあるのだろうか。

この問題に対し、わたしは、ひそかなる解答をもっていないわけではない。つまるところ、わたしはこう考えているのだ。兎の嘲笑に対して敢然と挑んだ「かめさん」のお里、それは、浜で子供になぶられているところを浦島太郎に助けられたあの義理固く甲羅も堅い亀とはちがって、ずうっと西の世界

の、小アジア、そのうえ時代も紀元前に遡って古代フリュギアか⁴⁾、あるいはもう少し海岸に近いトロイのあたりか、それとももっと南方の、イソップが活躍したギリシアのサモス島なのではあるまいか、と⁵⁾。というのも、結局のところ、このかめさん、イソップ寓話「かめとうさぎ」に登場するあのかめさんにほかならないからである、と。

「なーにが『ひそかなる』だ。そんなことなら分かりきっとる」と、あっさりわたしの考えを支持してくださる方も多いかもしれない。が、打ち明けた話、われらがかめさんが生粋の日本男児(?)などでは全然なくて、甲羅がまるで鉄兜ばりにこんもりと盛り上がった、ユーモラスかつチャキチャキのギリシア亀、つまりそいつを大驚が、捕まえて空に舞い上がったまではよかったものの、重さは重し、堅さは堅し、爪で掴んでいささかばかり持て余していたのを、「しめた! あの光るものの上におっこしたら、こやつ甲羅は木っ端みじん。そしたらおいらは、美味しい中身を頂戴できるって寸法さね!」と、あわれ悲惨、たまたま通りかかった偉大なる悲劇作家アイスキュロス、その「つつる然たる金柑頭」めがけて自由落下させたところの⁶⁾、その亀と、同族ないし親戚の亀さんだということをストレートに立証するのは、そうたやすいこととは思えないのだ。

というのも、「かめさん=イソップ亀」なる等式を証明するには、第一に、作詞家石原和三郎がイソップ寓話を踏まえて「うさぎとかめ」を作詞したことを確証しなければならない。が、そのこと自体、すでに相当な難題だからだ。彼が作詞した唱歌の例、たとえば「キンタロウ」「さるかに」「うらしまたろう」「はなさかじじい」「おおえやま」「牛若丸」「大こくさま」等をみると、いずれも国民的な「お伽話」に取材している。だから「うさぎとかめ」の場合にも、彼はたぶん、当時の子供たちがよく知っていた、なんらかの元話に拠っただろう。そういう推測が、当然成り立つ。もちろんしかし、そのことからただちに、その元話がイソップ寓話の「かめとうさぎ」だったことが結論されるわけではない。石原和三郎が、自分以外の誰かによる和製「うさぎとかめ」の話を元にして、唱歌「うさぎとかめ」を作詞したかもしない

いという可能性も、まったくないわけでもないからである。

Ⅲ 『原・伊曾保物語』と「もしもし、かめよ」

この問題は、はたして決着をつけることができるものなのか。『日本昔話事典』⁷⁾の「うさぎとかめ」の項を引くと、これの一挙解決を示唆することが記載されている。つまり「兎と亀の競争」は「歴史的には紀元前5世紀のイソップにはじまり、また地域的にも世界各地に分布しているが、旧大陸で口承された昔話からの採集例は少ない。わが国では文禄年間（一五九二～九五）の天草刊行本にイソップの和訳が見出され、以後この話は著名なものとして人口に膾炙している」と記されているのだ。これが事実なら、イソップ寓話「かめとうさぎ」は、安土桃山時代の末期にはすでに和訳され「人口に膾炙」していたことになる。

しかし、これは信用ならぬ。この記事を書いた人物は相当な粗忽者らしい。「イソップ」を「紀元前5世紀」の人とみなして恬として恥じないばかりではなく⁸⁾、天草本に「兎と亀の競争」譚が採録されていると決めつけて疑わない。ところが事実、天草本『伊曾保物語』すなわちイエズス会刊ローマ字本『エソポのファブラス』（文禄元年、1592年出版）には「かめとうさぎ」は採録されていないのである。のみならず、『エソポのファブラス』と並び称せられる国字本『伊曾保物語』すなわち慶長・元和年間の刊行になる仮名草紙本『伊曾保物語』にも、この寓話は出ていない⁹⁾。両『伊曾保物語』と幼年唱歌「うさぎとかめ」を繋ぐ鎖は切れているのだ。

ところで、『エソポのファブラス』と仮名草紙本『伊曾保物語』には共通の祖本『原・伊曾保物語』があったのではないかと推測されている¹⁰⁾。だから、もしその祖本に寓話「かめとうさぎ」が掲載されていたならば、この祖本を通じて「うさぎとかめ」が日本各地に流布されていた可能性は絶無ではないということになる。その場合、われらが「かめさん」は、かなりに高い確率をもって、天正時代には姿を見せていたことになるだろう。というの

も、翻案・和製・流布されてゆく「うさぎとかめ」の原型となったイソップ寓話「かめとうさぎ」を採録していたかもしれない『原・伊曾保物語』の翻訳、その元原稿は、当然ながら、その場合、天草本『エソポのファブラス』出版以前に存在していなければならなかったはずだからである。『エソポのファブラス』が天正遣欧少年使節団の携え帰った鉛活字と印刷機械を用いてイエズス会版第2回印刷物として出版されたのが1592年（文禄元年）。少年使節団が日本に帰ったのが1590年（天正18年）のことである。

他方、天草本の表紙につづく巻頭には「読誦の人へ対して書す」と題する詞書があって、そのなかに、

Carugayueni Superioresno voxe vomotte cono monogatariuo
Latinyori Nipponno cotobani yauarage, iroirono xenzakuno nochi,
fanni fircaruru nari. Core macotoni Nipponno cotoba qeicono tameni
taylorito naru nominarazu, yoqi michiuo fitoni voxie cataru
tayloritomo narubeqi mono nari. (かるがゆえに すべりおれすの お
おせをもって このものがたりを らていんより にっぽんのことばにや
わらげ、いろいろのせんざくののち はんにひらかるるなり。これまこ
とに にっぽんのことばけいこのために たよりとなるのみならず、よき
みちを ひとにをしえかたる たよりともなるべきものなり。)¹¹⁾

と記されていて、印刷に付される前に、『エソポのファブラス』のテキストが「いろいろの詮索」を経たうえで「版」に起こされた事情が述べられている。

その「詮索」は、もし『原・伊曾保物語』なるものがあったとすれば、当然、その『原・伊曾保物語』から何を取捨選択して天草本に採択するか、の検討にまで及んだことであろう。さらに、もしもその『原・伊曾保物語』が、元々ローマ字で和訳されてあったならば事は比較的に簡単であったろうが、仮名草紙本『伊曾保物語』と同様に、すでに漢字まじりの平仮名文だったと

すれば、これをいかにローマ字化するかという問題が生じたはずだ。もちろん、この「詮索」がどれほどの年月を要したかを知る術はない。が、それが相当に労力を要するものであったろうことは、推察がつく。だとすると、問題の『原・伊曾保物語』は、少なくとも少年使節団が日本に帰着した頃には、すでに存在していたと考えねばなるまい。

よろしい。では、その『原・伊曾保物語』はどこからきたのか。小堀桂一郎氏は、それが、1480年頃ドイツで出版されたシュタインヘーヴェル版イソップ寓話集（ラテン語）のヴァリエーションの一本（1580年頃）に由来する、と推定された。この推測が妥当なものであることは、今日ひろく承認されている。すると、問題の『原・伊曾保物語』にも、寓話「かめとうさぎ」は収録されていなかったであろう。というのは、シュタインヘーヴェル本にも、この寓話は採録されていないからである。こうして、ここでも、石原和二郎作詞「うさぎとかめ」とイソップ寓話「かめとうさぎ」を繋ぐ鎖は切れてしまうのだ。

IV 日本昔話「兎と亀」

ーうさぎ、かめ、のみ、しらみ、むかで、なめくじの競走ー

他方、わが国の昔話¹²⁾には、実にさまざまなヴァリエーションでの「うさぎとかめ」が登場する。そのうち、山梨県八代郡や北巨摩郡のものは、石原和二郎作詞による「うさぎとかめ」とそっくりと言ってよい。八代郡のものを挙げると、こんなふうである。

うさぎとかめの話はね。うさぎとかめがある日出会ってさ、「かめさん、かめさん、そんなにのろくてだめじゃないか。向こうの山まで、ほいじゃおれと駆け比べしようかな」と、うさぎがいったところが、かめも「さあほいじゃしよう」いうことで、まあ、ふたりでいっしょに飛び出して、向こうの山の松の木の間と、おって一番高い峰とか決めて、

飛び出したところが、まあうさぎさんの方はかめさんから見ると、たいへんに速いわけね。で、ずるを決めこんで、まあかめさん、後ろを見るとまだまだえらく半分も来ないので、ここでひと眠りもしていこうかということで、まあグーグーと眠ったわけね。するとうさぎさん、もう寝すぎてしまって、かめさんはとうにもう、目的地の決めた場所まで行ったところが、あとからうさぎさんが来て、「うさぎさんどうしたの」、「寝すぎてしまった」。なんていうようなお話もあったんじゃないけども、これはやはり、むかしのお爺さんのひとつのねえ、油断からそういう失敗がくるんだというようないましめの話ね。¹³⁾

北巨摩郡のほうは、これに対し、兎が亀に「お前は世界で一番のろい」と挑発し、かけくらべが始まって、最後に、勝った亀が兎に「さっきの自慢はどうした」と言うことになっている。これらは、①脚の速い兎が亀を挑発し競走が始まるが、②兎がたかをくくって居眠りしたために、③脚ののろい亀に勝つという点で、ギリシア伝来のイソップ寓話「かめとうさぎ」¹⁴⁾

Χελώνη καὶ λαγῶς περὶ ὀξύτητος ἥριζον. Καὶ δὴ προθεσμίαν στήσαντες καὶ τόπον ἀπηλλάγησαν. Ὁ μὲν οὖν λαγῶς διὰ τὴν φυσικὴν ὠκύτητα ἀμελήσας τοῦ δρόμου, πεσὼν παρ ὁδὸν ἐκοιμᾶτο. Ἡ δὲ χελώνη συνειδυῖα ἐαντὶ βραδύτητα, οὐ διέλιπε τρέχουσα, καὶ οὕτω κοιμώμενον τὸν λαγῶν παραδραμοῦσα ἐπὶ τὸ βραβεῖον τῆς νίκης ἀφίκετο. Ὁ λόγος δηλοῖ ὅτι πολλάκις φύσιν ἀμελοῦσαν πόνος ἐνίκησεν.

亀と兎が足の速さのことで言い争いをした。そこで決着をつけるべく時と場所を定めたとえで袂を分かった。さて、兎はというと生まれつき足早なので、まともに走ろうとせず、道を逸れて眠りこんでいた。しかし、亀のほうは、自分の足が鈍いのを自覚していたものだから、怠りなく走り続け、寝ている兎のかたわらを通り過ぎ、勝利を得た。この話は、怠れば素質も往々にして努力に打ち負かされる、ということを明らかにし

ている。

と基本構造をひとしくするものである。が、文飾の点では、唱歌「うさぎとかめ」のほうにはるかに近いものである。

ここで当然起こってくるのは、唱歌「うさぎとかめ」は、イソップ寓話とは関係なしに、日本昔話「兎と亀」を素材として成ったのではないか、という疑問である。問題はここに、俄然、錯綜してくる。というのは、これら日本昔話における「兎と亀」そのものは、いつ、どこから来たのかが、当然、問われることになるだろうからである。

日本昔話「兎と亀」は、山梨県八代郡や北巨摩郡で採集されたもので尽きるのではない。これらと基本構造を等しくするものに次のようなものがある。

- 一 ぴょんぴょん跳ねるのみともじもじしてのろまのしらみが「走りぐっちょ」する。のみは勝つものと思ひこみ「途中で茶屋がかりして昼寝」し、しらみに負けてしまう。(長崎県壱岐郡)
- 二 むかでがなめくじらに武装競争を迫る。なめくじらは「どうぞこらえてくれ」と断るが、むかでは聞かず「ほんなら、もう噛み殺す」と脅迫する。こうして競争がはじまるが、意外な結末となる。なめくじらのほうは終点まで行って戻ってくるが、むかでのほうは、その沢山ある足に脚絆をまくのに時間がかかったため出発できないでいたのである。(京都府丹波和知)

「のみとしらみの競走」は、うさぎがのみに、かめがしらみになっただけのことで、基本構造はちょうど、先に引用したイソップ寓話「かめとうさぎ」と同じである。ただ、この話の最後には、「山王さまはこいつなかなかよういかんといって、筆の先でしらみをつかれた。それでしらみはいまでも黒いものだという」因縁譚が付け加えられている。「兎と亀」話を前提にして因縁譚を展開するものには他に和歌山県日高郡の「兎と亀と梟」などがある。

他方、「なめくじらとむかでの競争」において、この話を語った和知町大簾の男性が、それが「ちょうど、前の兎と亀みたいなもんやな」と、「兎と亀」の一つのヴァリエーションであることを明らかにしていることが注目される。同じことが新潟県南蒲原郡の「亀に負けた兎」についても言える。この昔話は、「兎が亀とかけくらべをして負けて帰ってきたので、兎村では相談して、『お前みてようなものを村におくことはならんすけね、出ていってくれ』といて、追出してやった」と始まる。これはつまり、「兎と亀」の話を前提したその後日譚なのである。

元話としての「兎と亀」を前提としてつくられたと思われる動物競走譚は数多い。「猫と蟹」（鹿児島県大島郡）、「虎と狐」（新潟県南蒲原郡）、「鯨となまこ」（山口県大島郡）等々。

では、その元話「兎と亀」はどこからきたのか。これは実に漠として答えがたい問題である。昔話なるものについては、それが「村々の老翁老嫗たちによって」「すべて古くから語り伝えられてきた口承の物語で」「ある特定の個人によって創られたものではありません」と言うことはできても、いつ、誰が、それをつくったかについては、原則的に答えようがない。それらは、聞き取り調査が行なわれた時点を遡る遥かな昔につくられたものであるかもしれないし、ほんの一世代かそこいら先の時代につくられたものかもしれないのである。

だとすると、その元話が、いつのころか日本に入ってきた、シュタインハーヴェル系統のものではない、イソップ寓話集和訳版収録寓話「亀と兎」を核として形成されたという可能性も、完全には否定しきれないことになる。その別系統のイソップ寓話集は、例の両『伊曾保物語』以前のものではあったかもしれないし、以降のものであったかもしれない。しかし、天草本『イソポのファブラス』以前にそうした別系統本〔稿本〕があったことだけは、どうも確からしいのである。それは、次のような事情が知られているからである。

先にみたように、仮名草紙本『伊曾保物語』と天草本『伊曾保物語』は、同じ一つの手稿本『原・伊曾保物語』から枝分かれしたもので、源流をたど

ればともにシュタインハーヴェル本イソップ寓話集に帰一する、と推測されている。しかしその推測が当てはまるのは、あくまでもシュタインハーヴェル本と両『伊曾保物語』に共通する部分についてのみで、天草本の下巻収録の大部分の寓話は、シュタインハーヴェル本や仮名草紙本『伊曾保物語』の寓話に対応するものがない。それらの原本が何であるかは、未だに不明なのである¹⁵⁾。が、その事実はしかし、天草本が少なくとも二種類以上の異なる系統のイソップ寓話集から成ったものであることを明らかにする。

したがって、ここで想像を逞しくして、天草本編纂にあたって用いられた非シュタインハーヴェル系統本に由来する和訳イソップ寓話稿本には、元々、イソップ寓話「かめとうさぎ」が含まれていたのだが、天草本テキスト編纂にあたってたまたま選ばれなかっただけなのだと仮定するならば、その非シュタインハーヴェル系統本がなんらかの経路で流布されるなかで、イソップ寓話「かめとうさぎ」がわが国に知られるようになり、これが日本昔話「兎と亀」形成の核となったという可能性も、これまたまったく絶無ではない、と言えるかもしれない。

しかしこれは、所詮、空中樓閣の思弁であるにすぎない。非シュタインハーヴェル系統本に基づく『原・伊曾保物語』なるものは、実際には、どこにおいても発見されていない。したがって、イソップ寓話「かめとうさぎ」と石原和三郎作詞による幼年唱歌「うさぎとかめ」をつなぐ鎖は、残念なことに、依然として切れたままなのである。

V われらが「かめさん」は、「青い目をした」亀である

こうなれば、唱歌「うさぎとかめ」イソップ起源説をなにがなんでも言い張るために残された方法としては、ただひとつ、作詞家石原和三郎氏に証言を求め、「はい、わたしは、唱歌『うさぎとかめ』をつくるに際し、イソップ寓話『かめとうさぎ』を参考にしました。これ、ほんとのことです」、と言ってもらふことしか残されていないのではあるまいか。

しかし、この方法には致命的な欠陥がある。「うさぎとかめ」ができてから、すでに百年余の歳月が経過しているのだ。石原和三郎氏自身がはるかな昔に物故されているだけではなく、石原和三郎氏の作詞事情に通じている人々の証言を得ること自体も、すでにきわめて困難なことになってしまっている。そこで、唱歌「うさぎとかめ」イソップ起源説にしぶとく食い下がるつもりなら、もっと別の方法を探さなければならないことになるだろう。

ここで視点をおおきく転じ、当時の子供たちが喜んでこの唱歌を歌ったという事実に着目してみたい。なぜ子供たちは、『幼年唱歌』が出版されるや、全国津々浦々、いっせいにこの唱歌を歌いだしたのか。その元話を、すでによく知っていたからではないか。つまり子供たちは、この唱歌のうちに、すでに旧知の仲になっていた「うさぎ」と「かめ」を見出したのではないか。そしてその事実こそ、石原和三郎が作詞上の重要な動機としたものではあるまいか。だとすれば、石原和三郎その他による直接・間接の証言が得られなくとも、子供たちが知っていたその元話が、イソップ寓話の「かめとうさぎ」であったかどうかを確かめることによって、わたしたちは、問題のかめさんのアイデンティティーを、かなりの確実性をもって見定めることができるのではあるまいか。

さて、ここまできると問題は、唱歌「うさぎとかめ」が作詞された明治34年以前の子供たちの「かめさん」に関わる情報源を探ることに絞られる。で、その最たるものは、もちろん、学校の教科書、そして児童書ということになるだろう。こういう眼で明治初期からのイソップ文献を小学校教科書のうちに探してみる。すると決定的なものがみつかる。それは、明治初年より明治12年頃までの小学校『修身』教科書として「広く使用されたものとして認められる」として講談社『日本教科書大系』（近代篇第一）に収録されている渡部温訳『通俗伊蘇普物語』（三巻）の存在である。これは、中村正直『西国立志編』、箕作麟祥『泰西勸善訓蒙』、福澤諭吉『童蒙をしへ草』などとともに小学校「修身」教科書としてよく読まれたものである。その巻之一の第27話として「兎と亀の話」が掲載されている。引用しておこう。

兎（うさぎ）。亀（かめ）の行歩（あるきかた）の遅（おそ）きを笑ひ。愚弄（ばかに）して。「コウ。こゝへ来（き）や。競走（かけっこ）をしよう。乃公（おれさま）の足は何（なん）で出来（でき）てると思ふゾ」と威張（いば）れば。亀は迷惑（めいはく）には思へども一つ處へおし並び。サアと云れて寸分（ちつと）も猶豫（ゆうよ）せず。例の通り遅々（のそりのそり）とあるき出（い）だす。されど兎は固（もと）亀を侮（あなどつ）て居（お）る事なれば。一向（いつかう）に遽（せ）きもせず。うさぎ「吾（おれ）はマア一睡（ひとねいり）して往（い）くから。急（いそい）で往（やん）なせへ。直（ちき）に追越（おひこ）すよ」と云て微睡（とろり）とする内に。亀の影（かげ）が見（みえ）なくなった故。兎胆（きも）を消（つぶ）し。急（きう）に躍出（はねだ）して約束（やくそく）のところへ至（いつ）て見れば。亀は先刻到着（せんこくとうちやく）して。欠伸（あくび）をして居たりけると。遅緩（ゆるやか）なりと弛（たゆま）ざるものは。急（きう）にして怠（おこた）るものに勝（か）つ。

この修身教科書『通俗伊蘇普物語』は、凡例によると「明治六年二月序文、明治八年十一月版權免許、渡部氏蔵梓木版和装本全六冊中巻一から巻三まで三冊を原本として使用」したものである。元本の全6冊本『通俗伊蘇普物語』は、明治5年から8年までの間に出版され、第1巻には明治5年官許とあり、第4巻には明治6年官許、第6巻には明治8年11月13日版權免許とある。この元本はその例言にあるように、明治五年に渡部温が Thomas James の撰になるものを復刻刊行した『英文伊蘇普物語（イソップファーブルス）』を翻訳したもので、全部で237篇のイソップ寓話を収録しているが、「兎と亀の話」はその中巻一の19ページに収録されている。

『通俗伊蘇普物語』は、欧米の文化や風俗が尊ばれた文明開化の明治初期に、西洋文化に対する国民の蒙を啓くものとして盛んに出版された翻訳書類

のひとつとして現れ、わが国におけるイソップ寓話翻訳史上に一新生面を拓いたものであった。そして、これ以降、わたしたちはこの書物にひきつづいて、前田紅雪（健次郎・紅雪山人）訳『伊曾保物語』（19年2月）、田中達三郎訳『伊曾保物語』（寓意懲勸）（21年）、鈴木青溪（常松）訳『伊蘇普物語』（25年）等々、英米系のルートを通じてのイソップ寓話が續々と出版されていくのを見る。西村真次『イソップのはなし』（35年）、上田萬年『新訳伊蘇普物語』（40年）、巖谷小波『イソップお伽噺』（44年）等がそれである。

他方、この間における教科書の流れを見てみると、まず、明治20年文部省出版『小學讀本 卷四（初等科）』第一課に原亮策纂述の「亀とうさぎ」として

「あゆむこと。おそしといへども。怠らず。ゆくときは。つひに千里の遠きにも。いたるべし。むかし兎と亀とありて。はしることをば。たくらべしが。兎は。己が足のはやきにほこり。亀の歩みのおそきを侮りて。途中に。ひとねふりし。やがて目をさましてみれば。亀は。はや定めたる處につきて。勝ちをとりしとぞ。」

や、工藤精一編『新読本』五における「兎と亀」として現れ、そしてこれは、唱歌「うさぎとかめ」が出た前年に当たる33年9月普及舎刊行『新編修身教典』卷一第十六課「かめとうさぎ（ユダン タイテキ）」や、同年12月坪内雄藏著富山房刊行『國語讀本』卷一さし絵入り「ウサギガヤスム。カメガイソグ。」、さらに明治34年『修身教科書入門』所収「うさぎとかめ」等々へと連なっていくのである。

石原和三郎は、明治29年から33年まで東京高等師範学校附属小学校に奉職していた。その彼が、これらの教科書に現れる「うさぎとかめ」に精通していなかったはずがない。もちろんしかし、唱歌「うさぎとかめ」を創ったとき、石原和三郎自身が、明治34年以前におけるこれら数多いイソップ文献のうち、どれに拠ったかは明らかでない。しかし唱歌「うさぎとかめ」の「か

めさん」が天草本や仮名草紙本に登場する「イソポ」や「伊蘇普」ではなく、ましてや日本昔話に登場する「かめ」でもなく、明治維新以降わが国に押し寄せてきた欧米文化の波に乗ってやってきたイソップ寓話集、そこに含まれていたひとつの寓話「かめとうさぎ」－もちろんそれは、古代ギリシアにおけるファレロンのデメトリオスや、たぶんはさらにエレアのゼノンの時代における口承寓話にまでゆきつくはずのものであるが¹⁶⁾－にでてくる亀であること、そのこと自体は、もう間違いないように思われる。

時代は大きく変わって、明治維新以降の人々が馴染んでいたイソップは、もはや天草本や仮名草紙本に登場する「イソポ」や「伊蘇普」など、ポルトガルやオランダ経由の、あの古く懐かしい南蛮文化の香りを伝えるイソップではなく、黒船がおしひらいた文明開化と英学興隆の産物、維新以降におけるわが国の公教育政策と学校制度のなかであらたに蘇生させられたところの、「青い目をした」イソップだったのである。

注

- 1) 石原和三郎作詞・納所弁次郎作曲《『幼年唱歌 二編上巻』所収、明治34年（1901年）7月）
- 2) 1865（慶応元）年10月12日～1922（大正11）年1月4日。群馬県勢多郡東村花輪に生まれる。1877年（明治10）年13歳で助手教員となり、1891年群馬師範を卒業、郷里の花輪小校長に任命される。1894年に「小学校歌集註解」を出版。同年11月東京高師（東京教育大、現筑波大）付属小訓導に転出。1900年東京高師付属小をやめ、富山房に入社。坪内逍遙のもとで「小学国語読本」編纂にたずさわった。この年から石原作品を多くのせた「幼年唱歌」（全10冊）が順次出版され、「うさぎとかめ」「花咲翁」「金太郎」などが世に出た。1922年（大正11年）1月4日、57歳で没する。
- 3) 女中＝いま風にいえばお手伝いさん。しかしその実態はだいぶ異なる。
- 4) 『エソポのファブラス』冒頭イソップ伝は次のように始まる。‘Evropa no vchi Phrighiatoyu cunino Troia toyu jorino qinpenni Amoniato yu satoga vogiaru.’そして国字本『伊曾保物語』冒頭のイソップ伝は次のように始まっている。「さる程にえうらうはのうち。ひりしやの国とろやといふ所に。あもうにやと云里有。」
- 5) これらの推測はすべて『イソップ伝』におけるイソップの出自に関する記事に基づいているが、詳細は岩男久仁子『G本と天草本ならびに古活字本との比較を中心とするイソップ伝研究』（桃山学院大学大学院文学研究科博士論文）を参照されたい。
- 6) 夏目漱石『我輩は猫である』第8回に次の記事がある。「昔し希臘にイスキラスと云う作家があったそうだ。この男は学者作家に共通なる頭を有して居たと云う。我輩のいわゆる学者作家に共通なる頭とは禿と云う意味である。何故頭が禿げるかと云えば頭の栄養不足で毛が生長するほど活気がないからに相違ない。学者作家は尤も多く頭を使うものであって大概は貧乏に極まって居る。だから学者作家の頭はみんな栄養不足で、みんな禿げて居る。さてイスキラスも作家であるから自然の勢禿げなくてはならん。彼はつるつる然たる金柑頭を有して居った。所がある日の事、先生例の頭一頭に外行も普段着もないから例の頭に極まってがーその例の頭を振り立て振り立て、太陽に照らしつけて往来をあるいて居た。これが間違いのもとである。禿げ頭を日にあてて遠方から見ると、大変よく光るものだ。高い木には風があたる、光る頭にも何かあたらなくてはならん。この時イスキラスの頭の上に一羽の鷺が舞って居たが、見るとどこかで生捕った一疋の亀を爪の先に攫んだ儘である。亀、スッポンなどは美味に相違ないが、希臘時代から堅い甲羅をつけて居る。いくら美味でも甲羅つきではどうする事も出来ん。海老の緒に鬼殻焼はあるが亀の子の

甲羅煮は今でさえないくらいだから、当時は無論なかったに極まって居る。さすがの鷲も少々持て余したおりから、遙かの下界にぴかと光った者がある。その時鷲はしめたと思った。あの光ったものの上へ亀の子を落したなら、甲羅は正しく砕けるに極まった。砕けたあとから舞い下りて中味を頂戴すれば訳はない。そうだそうだと覗を定めて、かの亀の子を高い所から挨拶も無く落した。あいにく作家の頭の方が亀の甲より軟らかであったものだから、禿はめちゃめちゃに砕けて有名なるイスキラスはここに無惨の最後を遂げた。」

7) 『日本昔話事典』 稲田浩二ほか編, 弘文堂, 1977

8) イソップが歴史的に実在した人物であること、そのことは疑いない。ヘロドトスが『歴史』第二巻123以下においてエジプトの遊女ロドピスに言及し、「ロドピスは…ヘファイストポリスの子イアドモンというサモス人に仕えた奴隷女で、かの寓話作家アイソポス（＝イソップ）の同輩の奴隷であった。…ロドピスはクサンテスなるサモス人に伴われてエジプトへ来ると、媚を売って生業としていたが、ミュティレネ人のカラクソスなる者に大金をもって身請けされた。カラクソスはスカマンドロニュモスの子で、かの詩人サッポールの兄である」（松平千秋訳）と言っているからである。サッポールの生年について確実なことは言えないが、仮にその生まれをBC 630年頃に比定し、イソップの盛年（アクメー）をディオゲネス・ラエルティオスにしたがって第52オリュンピア紀（BC 572－569年）とすると、その生年はBC 610－600年頃に比定されうることになるだろう。つまりイソップはBC 7世紀から6世紀にかけての人なのである。なお Ben Edwin Perry, *Aesopica, A Series of Texts Relating to Aesop or Ascribed to Him or Closely Connected with the Literary Tradition that Bears His Name. Vol.I: Greek and Latin Texts*. The University of Illinois Press, Urbana 1952 および Ben Edwin Perry (ed.), *Babrius and Phaedrus*, Harvard University Press, LCL 436, 1965, Introduction, 3. Aesop, pp. xxxv ff. さらに、中務哲郎訳『イソップ寓話集』岩波文庫巻末の解説をも参照。

9) 『エソポのファブラス』と古活字本『伊曾保物語』については、前田金五郎・森田武校注『仮名草紙集』日本古典文学大系・岩波書店1965年、大塚光信校注『キリシタン版 エソポ物語 付 古活字本伊曾保物語』を挙げておく。

10) 小堀桂一郎『イソップ寓話 その伝承と変容』中公新書, 1978年を参照。

11) 平仮名化は筆者による。

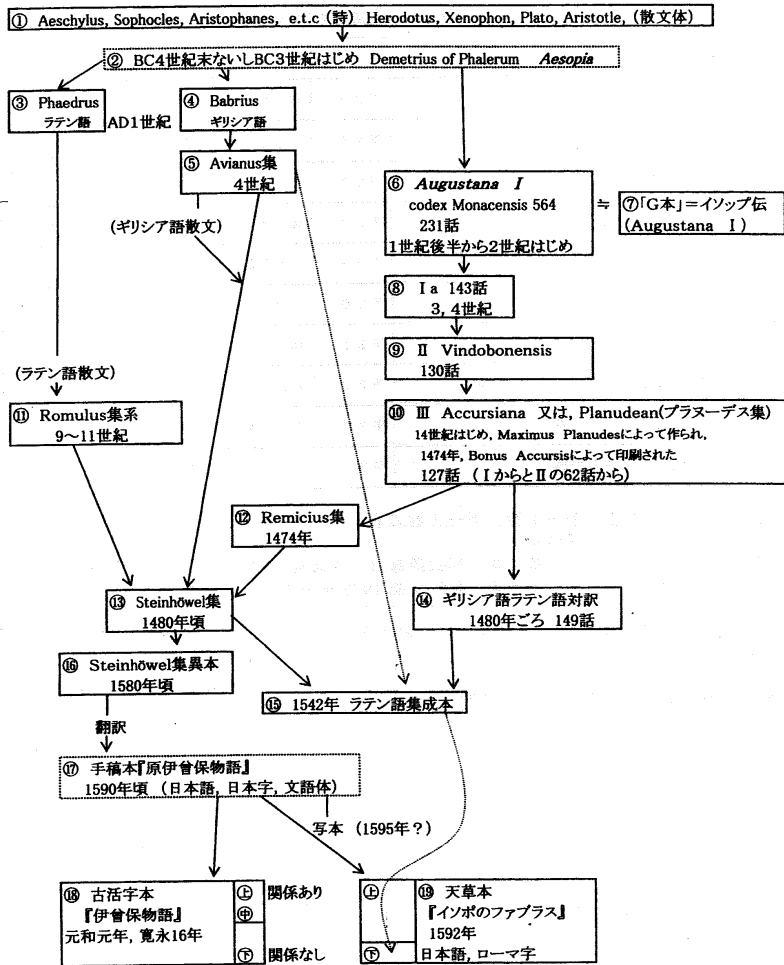
12) 『一寸法師・さるかに合戦・浦島太郎』（日本の昔ばなし III）関 敬吾編, 岩波文庫

13) 山梨県西八代郡市川大門町堀切・男

「もしもしかめよ」考

- 14) Émile Chambry, *Ésope, Fables*, Texte Établi et Traduit, Paris, Société d'edition Les Belles Lettres 1967のテキストに拠る。
- 15) その事情については、岩男久仁子前掲博士論文10ページならびに古活字本と天草本収録寓話対照表(17-19ページ)を参照。さらにこの研究ノート最後に付した岩男久仁子作成による「イソップ寓話伝承系統図」(博士論文20ページに収録)をも参照。
- 16) エレアのゼノンの運動駁論のうちの第二、所謂「アキレスと亀」は、私見によれば、元々、ゼノン自身の着想によって、イソップ寓話「かめとうさぎ」とホメロスの『イーリアス』第22書におけるアキレウスとヘクトールの競争譚を交叉させたところから出来上がったものである。したがって、その年代は少なくとも BC 5 世紀の前半にまで遡ることとなろう。

付図 イソップ寓話伝承系統図 (岩男久仁子作成)



A Study of the Song “Mosi mosi Kame yo”

Hideya YAMAKAWA

This paper is a secondary product which was spun off accompanied with my study of Zeno of Elea’s paradoxes against motion. Zeno’s second paradox among the four famous arguments against motion is called by Aristotle (Physics Z 9, 239b15-18) simply “the so-called *Achilles*.” However, according to Simplicius the commentator the *Achilles* was so called ‘because of the introduction into it of Achilles, who cannot possibly overtake the tortoise he is pursuing.’ (Simplicius, 1013. 31) But, why did tortoise make its appearance all of a sudden? Why is it the case that Achilles’ rival is no other than a tortoise?

My paper ‘Zeno’s Second Paradox against Motion, the *Achilles*’ is a solution to this problem. And this paper is by-produced through my Aesop-study concentrated on “Tortoise and Hare” which is included in the *Augustana Recension* whose primary source is possibly the *Aesopia*, the first collection of Aesopic fables published by Demetrius of Phalerum in the end of the fourth century or in the beginning of the third century B.C.